



愛知・稲武小学校オープンスペースでのチームティーチング、左奥で一斉指導、右手前で 進度に応じた個別指導が行われている

教育改革にあたって

日本学術振興会理事長 木田 宏



教育改革への背景

今度の教育改革で一番考えなければならないことは、“教育とは何か”ということだと思います。今まで教育とは、学校で教わることだと考えてきました。その学校で教わる教育というものの中味は、子どもが生まれて自然に大きくなってきて、物が少しわかるようになって、学校という所にいれて、望ましい方向に知識をつけていく、体力をつけていく、そしてその子の能力を高めるという方向で、そういう意図的な活動が教育だというふうに考えられていたわけです。明治以来その方向で努力をしてきて、みんなが小学校へ行くようになり、さらに中学校へ行くようになり、戦後は高等学校、大学へ行く人が増えました。

その教育のお蔭で現代日本の社会は大変発展もしてきたし、進んできました。それでは教育は発展し学校は増え、みんなが学校へ行くようになり、全てがうまくいったかということ、どうもそうではないのです。たしかに学校へ多くの人が行

くようになって、日本の経済も産業も発展してきましたが、あちこちに具合の悪いことが一杯起こっています。そこで今度は教育を見直そうという議論が起こっているわけです。その問題意識というのは当然であって、現にみんなが学校へ行くようになったら、学校は嫌だという子どもは出てくるし、学校で乱暴はする。昔よりは良い先生が揃ったはずなのに、教育はあまりうまくいっていないという、不具合な部分もたくさん起こっているわけです。

そこで教育改革という議論が起きたわけですが、今起こっているいろいろな問題は、明治以来進めてきた“教育は学校教育のことだ”という発想から、もう一度考え直してみなければ、片づかない問題が一杯起こっているのです。例えば、今学校の先生が何で困っているかといいますと、学校へ入ってくる子どもに体力がない、人に対する思いやりもない、人の話を聞こうともしない、そういう子

もが増えているからです。昔、先生は子供たちが学校へ来たら勉強を教えてあげますと言っていたのに、今は勉強をするところではないのです。その前に体力をつけてやらなければならない。もう少し人の心がわかる子どもにしなければならない。もう少し我慢ができる子どもにしなければならない。しかし、下手にそれをやろうとすると、いじめられっぱなしの子どもが出てくるという問題も起こっています。では、なぜそのような問題が起こっているのかといいますと、今までは子どもが育ってきて学校へ入って来る時、自然に発育という現象があつて、自然に発育している子どもに対して智恵をつけてやろうとか、もう少し良くしてやろうと、意図的に働きかけたら教育になると思っていたのです。ところが、発育そのものに問題があると言われるようになってきました。このため、もう少し早い段階、幼児教育から考え直さなければならないし、胎教から考えなければなら

ない。親は子どもを生んだら生みっぱなしではだめなのです。

学校でいろいろなことを教える前に、発育という自然現象があって、自然現象の上に教えていけばいいと思っていましたが、その自然現象がおかしくなっているわけです。そういうところから今問題が起こっているわけです。そこで“教育というのは教えることではなくて育てることなのだ”というふうに教育を考え直して、幼児期の教育のあり方、育て方をもう一度考えなければいけなくなってきたのです。ところが世の中が育てる方向に進んでいるかという、そうではなく、むしろ逆に育てない方向に進んでいるのです。そこに出発点での問題があるわけです。ですから教育というのは自然の発育の上で教えることだと思っていたのを“それではだめなのだ”というふうにみんなが考え直してもらおうということから始まらなないと、今起こっている問題は片づかないということが一つです。

教育の本質の変化

もう一つは教育は学校で教わることなのだと考えていて、学校である年限を教わったら、それをもとに、今度は世の中に出て仕事をするのだと思っていました。ところが今はそれではどうにもなくなってきました。学校で何を教わってきたのかが分からなくなって、大人は子供たちが何も学んでいないのではないかとやっている。義務教育は9年になりほとんどが高等学校まで行き、大学まで行く。その一方大学まで行って何も勉強しないという現象が起こっている。これでは学校教育は全然役に立たない、仕方がないので世の中に出てきたら、会社が鍛え直さざるを得ないということが現実起こっている。これは、“学校教育は役にたたん”といっているわけです。これも言われてみるとその通りで、教育とは学校で教えることであり、学ぶことである、それが終わったら世の中に出て仕事をしていけばいいということが成り立たなくなってきたというわけです。

明治以来それをずっとやってきたけれど、世の中が変化して、従来のやり方ではもう通用しなくなっている。世の中に

出たら、その日から鍛え直す、教育をし直す状態になってきている。そうすると教育は学校で終わらないで世の中に入って会社に勤め、仕事をし初めても、勉強を続けなければならないというふうになってきています。教育がそういうふうになってきますと、“教育は先生が教えることである”というパターンが成り立たなくなる。世の中に入って仕事をしながら勉強を続けるという風に教育が変わってくる。そうしないと会社も倒れてしまうわけです。新人を3、4年放っておくと使い物にならなくなるわけです。日進月歩で世の中が進んでいるので、仕事をしながら新しいことを勉強をする必要が出てきたのです。

では誰が教えるのかといいますと、職場の指導者も教えるかもしれないが、本当は自分で勉強するしかないのです。自分で勉強する人間が増えてこない限り、日本は世界の競争に全て後れをとってしまう、ということになるのです。そうすると、教育というのは教わっていればよいということではなくて、自分で勉強することであり、しかも必死に学習しなければいけない。今の大学のような教育ではどうにもなりません。それでは本人もだめになりますし、やがて日本もだめになってしまうでしょう。

教育目的の変化

教育は教わることではなくて自分で学ぶことであり、それは一生涯学ぶことだというふうに教育の目的を考え直さなければならない。そのことの自覚ができていないか、そのことが今問われているのです。そうすると一体教育は何のためにやっているのか、という問題も見直さなければならないようになってきます。明治の初めに始まって、時の教育は手に仕事をつけて、職業に役に立つことを教育というふうに考えてきたわけで、事実、日本の学校教育は職業教育に成果をあげましたし、産業教育もうまくいっていた。

その結果、日本の企業は力を持つようになりました。教育は職を手につけることであり、技術教育であったわけで、大学教育までそうだったのです。この職業

を身につける教育が、日本では重んぜられたのです。法律学を勉強するのは役人になるための手段として、経済学の勉強は会社に入って上手に会社を経営するため、工学を勉強するのは良い製品をつくるためというように、教育というのは仕事をするための手段であるということ、日本の学校教育ができてきたのです。

ところが今、世の中が変わりつつあるのです。学校で勉強したことだけでは一生涯飯を食べることができなくなってきた。すぐ勉強し直さなければならなくなった。違った専門の事に首を突っ込まなければならなくなった。自分は大学でこの事を勉強してきたのだから、その事以外は仕事をしないなどと言ったら、そういう人間は世の中で使ってもらえないのです。

そうすると“教育の目的は何か”それは“ある職業技術を身につけることだ”ということではないのです。基本的にどうということかといいますと生きる力があって、自分で学習する力があって、必要な事は何でも勉強できるという状態を常時維持していくということ、要するに自分で生きていくとして、あらゆる事態に対応できる力をつけることが教育なのです。それと同時に技術だって職業だって、日進月歩でどんどん進んでいますから、職業技術もある固定したものを教わるということではなくていけます。

今まで日本の教育は職業に付くための教育であり過ぎたのです。そのために職業に付くために手段としての勉強をしているということできている。それが変な形で行き過ぎた結果、就職しやすい大学で、就職しやすい学科を勉強するという所へみんなが走り過ぎた、評判の良い大学へ行って企業が喜びそうな勉強だけをするのが目的なのです。一番就職しやすいのは東大の法学部へいくことなのです。これは、法律の勉強をするのではなくて、良い条件の会社に就職するために入学の競争をするというのが、学校教育の目的になってきている。そして試験地獄という世界にもまれば、困った現象が起こったわけです。学校教育の目的が本来何のためか考えると、今の教育はあ

まりにも手段としての教育、試験のための教育にかたより過ぎているわけで、実際に職業人としては役に立たないから、就職したら全部鍛え直すということになるわけです。

教育改革の基本課題

そうすると、今までの学校教育は、まったく役に立たない教育をしてきたということになります。その意味で、教育というものをもう一度根本から考え直さなければならぬということが、今の基本的な問題意識なのです。これを私流に考えますと、さきほどの繰り返しになりますが、教育というのは自分で勉強できて、自分が何であるかが分かる、必要な事に対応して随時学習をして事に応じて行ける、それが教育の基本目標となるわけです。

そうして、しかも世の中に出て、必要に応じた最新の技術を勉強し訓練をしなければならぬ。そこで教育について一方では今までよりも、より以上に基礎的な教育をしっかりやらなければいけないし、専門的な学習もできるようにしなければいけない。

今までは、専門的な職業教育も中途半端なものだから、企業がやっていた。ところが大企業ならそれができますが、中小企業は激しい競争状態に置かれているので、全部企業内で自分の従業員の再教育をやっておれない、再教育をしても他の企業に移ってしまうこともあるわけです。ですからどうしても仕事をするために勉強するという場を、第三者が企業の外でつくるようにしなければいけない。厳しい職業のための教育機関が必要で、今までの職業訓練所のようなものでは間に合わないわけです。もっと世界の先端の技術、世界の先端の知識を教えるような教育の場がなければならぬわけです。学校をそういう観点から考えてみますと現状では両方とも中途半端です。そこで、学校も含めて人間の教育全体を考え直すというのが、今日の教育改革の基本的な課題なのです。

現に初・中等教育では学校の先生方が子供たちの体力をつけてやらなければならないと意識し始めています。しかし、

学校だけでそれができるとは思えない。これは家庭環境も含めて子どもたちの基本的な健全な体力・精神力をつけるという点で家庭も社会ももっと力を合わせていかなければなりません。学校はそれと一緒にあって、体力をつけてやらなければならないし、気力を養ってやらなければならないのですが、一方、学校は自分で勉強できるような学ぶ心というものを小、中、高等学校を通じて身につけてやらなければならないという使命感があります。そして大学はもっと大人を相手に、本当に必要な専門知識を勉強できるようになっていかなければならないのです。今のように大学が若者の遊び場であるようでは困ります。

大学は、社会の第一線で仕事をしている人が、本当に必要としている知識を教えてあげる。一緒にあって勉強・研究をする、こういう場に大学を改造しなければいけない。そして大学教育というものが誰でも、いつでも、どこでも勉強できるように変わっていくというように、多様化し弾力化していくことを考えなければならぬ。その場合、教育というのは最新の科学技術、今日の情報化社会の高度の情報技術というものを使って、学習したいという人に学習の情報を届ける、そういう努力をしなければいけないのです。

生涯教育について

そういう意味からいいますと、ようやく放送大学が教育の場に出てきました。遅きにすぎなのですが、世の中ではラジオ・テレビが市民の中いき渡っているのに、教育の場にはそれが届いていなかったのです。教育の手段として、あるいは学習の手段として、それをどう考えたら良いか、どういう番組ができたなら自分で勉強できるのかということについても本当は分かっていないし、訓練もされていません。今東京にできた放送大学でようやくテレビを通じて必要な知識を人に伝えようとする、という話の仕方をし、どういう呼掛け方をすれば良いのかということが、やっと実験的に始まったわけです。忙しい時間の中で時間をさいて勉強する人が、どういうふうにする

ば勉強できるかというのは、放送大学で勉強しようという人が初めて遭遇したのです。これからはもっともっと、そういう人が増えるでしょう。そうすると学習する仕方についても新しい工夫があるし、教え方についても新しい工夫がいろいろあります。そういう意味で大学・高等教育というのは、今までのように学校という枠があって、カリキュラムがあって、そこへ学生が来てしかたなしに教室に出て先生の話も聞かないで、わいわい時間だけ過ごし、出席点をとって卒業するというような大学も基本的に考え直さなければならぬ時にきています。

したがって、大学は今まで以上に幅広い一般的な教養教育、世界の最新の動きが分かる教育、あるいは技術の動きが分かる教育、が必要となる。またお年寄が来れば健康はどうしたら維持できるのかということについても教えてもらえるような場でないといけないのです。

大人が必要とする知識が教えられる大学、それは幅広い一般教養教育であると同時に、もっともっと多様な専門教育を教えるという場にもなければならぬ。そういうふうにしてはじめて人間が少ない労働時間で収入をあげることができる、生産性を高めるということはということなのです。

生産性を高めて、少ない労働時間で良い製品をつくるということにならなければ、日本は世界の中で生きていけないのです。お隣の中国その他がどんどん追い上げてくる。そうすると労働の生産を高めれば高めるほど、余暇時間というのは多くなるのです。余暇時間はどうするかといいますと、自分の才能を開発する、いろんな能力を高めるそして行き着く先は“何のために生きてきたか”を見直すような学習、教育、そして人間としての悟り、生涯を通じて“良かった”という生涯が自分で呟けるような人生の生きざまの努力というものをしなければいけない。教育というのは、生まれて死ぬまでの安心立命の課題なのです。その意味で、今まで行われてきた教育は学校で教わることだという発想を、根底から考え直さなければならないということが、今日の教育改革なのです。(談)